

「外郎売り」

①拙者親方と申すはお立会いの中にござりましようが、お江戸をたつて二十里上方、相州小田原一色町をお過ぎなされて、青物町を登りおいでなさるれば、欄干橋虎屋藤衛門ただ今は剃髪いたして、円齋と名乗りまする。

元朝より大晦日までお手に入れまするこの薬は、昔ちんの国の唐人外郎という人わが朝へ来たり、帝へ参内の折からこの薬を深く竈め置き、持ちゆる時は一粒づつ、冠の隙間より取り出す。よつてその名を帝より「とうちんこう」とたまわる。すなわち文字には頂き、透く、香いと書いて「とうちんこう」と申す。

ただ今はこの薬殊のほか世上に広まり、方々に偽看板を出し、いや小田原の灰俵のさん俵の炭俵のいろいろな申せども、平仮名をもって「ういろう」と記せしは親方円齋ばかり。もしやお立会いの内に熱海か塔ノ沢へ湯治にお出でなさるるか、または伊勢参宮の折からは、必ず門違いなされまするな、お登りならば右の方、お下りなれば左側、八方が八棟、表が三つ棟玉堂造り、破風には菊に桐のとうのご紋をご赦免あつて系図正しき薬でござる。

②いや最前より家名の自慢ばかり申しても、ござらない方には正身の胡椒の丸呑み白川夜船、さらば一粒食べかけて、その気味合をお目にかけましょう。

まずこの薬をかように一粒舌の上にのせまして、腹内へ納めますると、いやどうも言えぬは胃、心、肺、肝がすこやかになって、薫風喉より来たり、口中微涼を生ずるがごとし。魚鳥きのこ、麵類の食い合わせ、そのほか万病即効あること神のごとし。

さて、この薬、第一の奇妙には舌のまわることが銭独楽が裸足で逃げる。ひよつと舌がまわり出すと、矢も盾もたまらぬじや。

③そりやそりや、そらそりや、まわってきたわ、まわってくるわ、アワヤ喉、サタラナ舌にカガサ歯音、ハマの二つは唇の軽重、開合さわやかに、アカサタナハマヤラワ、オコソトノホモヨロオ、一つへぎへぎに、へぎほしはじかみ、盆まめ、盆米、盆ごぼう、つみ蓼、つみ豆、つみ山椒、書写山の社僧正、粉米のなまがみ、粉米のなまがみ、こん粉米の小生がみ、繻子ひじゆす、繻子、繻珍、親も嘉平、子も嘉平、親かへい子かへい、子かへい親かへい、ふる栗の木古切り口、雨合羽かばん合羽、貴様の脚絆も皮脚絆、我らが脚絆も皮脚絆、しっかわ袴のしっぽころびを三針はりなかにちよと縫うて、ぬうてちよとぶんだせ、かわら撫子野石竹、のら如来、のら如来、三のら如来に六のら如来、一寸先のお子仏におけずまづきやるな、細溝にどじよによりり、京の生鱈奈良生まながつお、ちよつと四五貫目。お茶立ちよ、茶立ちよ、ちやつと立ちよ茶立ちよ、青竹茶せ

んでお茶ちやつと立ちや、来るわ来るわ何が来る、高野の山のおこけら小僧、たぬき百匹、箸百膳、天目百杯、棒八百本、武具、馬具、武具、馬具、三武具馬具、あわせて武具、馬具、六武具馬具、菊、栗、菊、栗、三菊栗、合わせて菊、栗、六菊栗、麦、ごみ、麦、ごみ、三麦ごみ、合わせて麦、ごみ、六麦ごみ、あのなげしの長薙刀は誰がなげしの長薙刀ぞ。向こうの胡麻がらは荏の胡麻がらか真胡麻がらか、あれこそ本の真胡麻がら、がらびいがらびい風車、おきやがれこぼし、おきやがれ小法師、ゆんべもこぼしてまたこぼした。たあぶぼぼ、たあぶぼぼ、ちりから、ちりから、つつたつぽ、たつぽたつぽ一丁だこ、落ちたら煮てくお、煮ても焼いても喰われぬものは、五徳、鉄きゅう、かな熊どうじに、石熊、石持、虎熊、虎きす、中にも東寺の羅生門には、茨木童子がうで栗五合つかんでおむしやる、かの頼光のひざ元去らず、

④ 鮎、きんかん、しいたけ、定めてごだんな、そば切り、そうめん、うどんか、愚鈍な小新発地、小棚の下の小桶に小味噌があるぞ、こ杓子、こもつて、こすくつて、こよこせ、おつとがつてんだ。心得たんぼの川崎、神奈川、程ヶ谷、戸塚は走つて行けば、やいとをすりむく、三里ばかりか藤沢、平塚、大磯がしや小磯の宿を七つ起きして早天そうそう相州小田原とうちんこう、隠れござらぬ貴賤群集の花のお江戸の花ういろう。

⑤ あれあの花を見て、お心おやわらぎやという。産子、這う子にいたるまで、このいろいろのご評判、ご存じなことは申されまいいづぶり、角出せ、棒出せ、ぼうぼうまゆに、うす、杵、すりばち、ばちばちぐわらぐわらぐわらと羽目をはずして今日お出でのいづれも様に、上げねばならぬ、売らねばならぬと息せい引つ張り、東方世界の薬の元締め、薬師如来も照覧あれと、ほほ敬つて、いろいろはいらつしやりませぬか。

・外郎売りのポイント

外郎売りは養成所などでも広く使用されるテキストで舌滑、語りかけ、表現の課題として利用されています。始めはゆつくりと話まらないように練習し、慣れて来たら表現にも気を配ります。

- ① スタートは落ち着いてゆつくりと、道行く人々の気を引くように。
- ② ここからは集まり始めたお客に語りかけるように気持を変えて。
- ③ この辺りからスピードアップ、ぐつと注意を引きましょう。
- ④ さらにアップで押しの一手。
- ⑤ ラストに向けてスピードを落としながらしっかりとお客に分かるように締めましょう。

「外郎売り」について

万病に効くという特攻の薬「外郎」を宣伝して歩く行商人を外郎売りと呼んだ。

1718年に江戸森田屋で若緑勢曾我（わかみどりきおいそが）において初演。二代目市川団十郎が外郎売りに扮して早口で言い立てた弁舌が話題になり、その後歌舞伎の十八番となった。

- ・注意 ここに記載した以外にもさまざまな資料があり読み仮名や送り仮名が異なる場合があります。
- また、練習の目的に応じて暗記を鍛える、滑舌とスピードを重視する、行商など芝居仕立てに軸するなど活用方法も様々です。